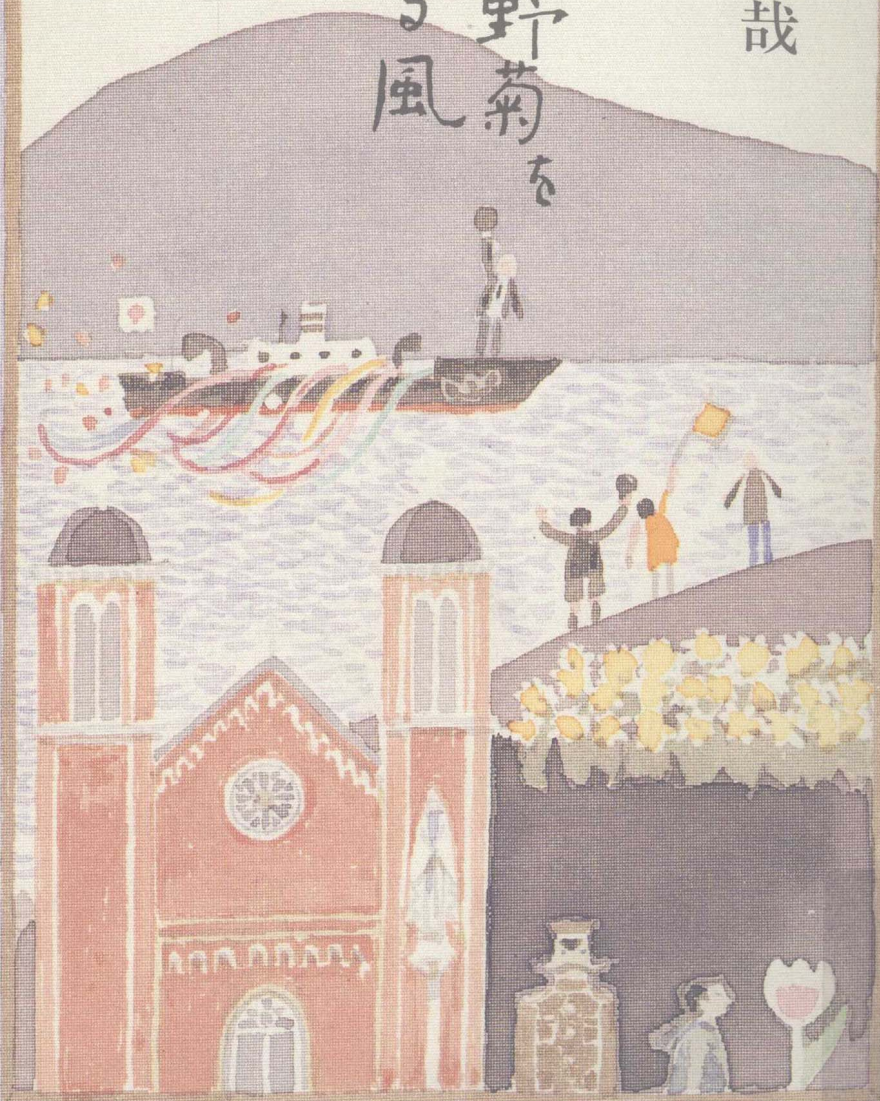


吉田直哉

敗戦野菊を
わたる風



吉田直哉

敗戦野菊を
わたる風



筑摩書房

吉田直哉（よしだ・なおや）
一九三一年東京に生まれる。
東京大学文学部哲学科卒業。
NHKディレクターとして、
ドキュメンタリー・シリーズ
「日本の素顔」「明治百年」
「未来への遺産」「21世紀は警告する」
「太郎の国の物語」、大河ドラマ「太閤記」「源義経」
「縦ノ木は残った」などを演出。
一九九〇年より一九九八年まで武蔵野美術大学映像学科主任教授。著書に『夢うつつの凶鑑』『癌細胞はこう語った・私伝吉田富三』『森羅映像』『蝶の埋葬』『脳内イメージと映像』『対談・目から脳に抜ける話』『まなこつむれば……』などがある。

敗戦野菊をわたる風

二〇〇一年四月十日 第一刷発行

著者 吉田直哉

発行者 菊池明郎

印刷 明和印刷

製本 積信堂

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五—三

〒二二一八七五五 振替〇〇一六〇八四二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。

〒三三二八五〇七 大宮市榎引町二六〇四 筑摩書房サービスセンター

TEL 〇四八六五一〇〇五三

敗戦野菊をわたる風・もくじ

林町の家		9
ドン白粉		13
駿河台の大樹		17
山椒魚の家		21
葡萄棚の下の怪物		25
「もうせん」のこと		29
反った白い指		33
ドンクと子猫		37
喪服の蝶		41
天主堂の向こう		45
出島のチューリップ		49
港みるべからず		53

竹ヒゴの魔術師

57

マル秘の呼び名

61

教練という煉獄

65

どう生きるか

69

配置につけ！

73

東京までの汽車

77

暗闇の首都

81

変わりはてた家

85

広瀬川流れのほとり

89

超新薬の臨床試験

94

蚕と梅の実

98

暗い力仕事

102

破壊のあと味		106
ルメイ勲一等の付け火		110
あの炎熱の日		114
ジープとDDT		119
ちがう光ちがう匂い		123
神々は渴く		127
蜂のしるしの夢		131
軍用缶のコカコーラ		135
七色の氷菓子		139
駒場寮の第一夜		143
一畳半の拠点		147
アンジェラスの涙		151

多士済済		155
あまりにも自由		160
昼夜と本末の転倒		164
ピアノ横町		169
ゆきやなぎの客		174
ガード下の畏友		179
「教祖」との二時間		183
まるでゴッホ		187
おひいさまの境遇		191
誰ヶ袖屏風の招き		196
蜜柑箱の中身		200
ピケとピケ破り		205

病室からの手紙	209
ゆきやなぎと敗戦野菊	213
「なよたけ」の作者	217
最後の手紙	222
配置につくとき	227

敗戦野菊をわたる風

装帧·安野光雅

林町の家

はやしちよう

ぼんやり火のともったハダカ電球が、長いひもを引きずって動いてゆく。暗い部屋の隅が、それにつれてちよつと明かるくなるのだが、また不気味に闇にのまれる。

電灯を手に行っているのは父で、そのあとに従う母の羽織の裾を、私はしっかり握りしめている。行く先も闇なら、背中のうちしろもまた闇なのだ。

——思い出というものは、どこにどんなかたちでしまいこまれているのか。

いくら考えてもわからないが、私の場合、このぼんやり火のともった、移動するハダカ電球が闇の奥にあつて、どうもいちばん古い思い出のようなのである。

まるで夢かまぼろしのように頼りなく、はかない情景なのだが、かなり大きくなってから思いきつて口にしてみて、現実の体験かもしれないことがわかった。

私は昭和六年、東京小石川の原町で生まれたのだが、その年のうちに両親は同じ小石川の、

すぐ近くの林町の借家に引っ越した。ところがその家には、電灯がひとつしかなかったという。しかし驚くほど長いコードがついていたから、別の部屋を明かるくする必要があると、コードを引きずって移動した。ほんとうのことよ、と母は言ったのである。

でもいくらなんでも不便だから、すぐ大家さんにたのんで、御不浄までぜんぶに電気がつくようにしてもらった。もちろん昭和六年の、その年のうちに。だから、あなたが歩けるようになったときにはもう、どの部屋にも電気はついていたはずよ。

すると私は、母に抱かれて移動していたのだろうか？ そんなはずはない。恐怖にかられて母のあとを追うそのときに、光が移動して行くのである。

引っ越しとそれにつづく電気工事の日付けは確からしい。となると、数えで一つ、四月生まれのゼロ歳児の記憶になってしまう。そんなことはあり得ないとすれば、大きくなってから妙な電灯の話を書いて、想像でつくりあげた情景なのだろうか？ しかし、どう考えても、私がいき前にその電灯の話が出たおぼえはないのである。

どこにどんなかたちでしまいこまれているのか判然としないが、思い出というものは、この一事だけをみても、はなはだ頼りない。日付けというファクトをつきつけられたり、正しいがやつのころのことなど、おぼえているはずがないと自分でも思うと、たちまちぐらつくのである。

しかし、闇のなかを移動して部屋を照らし出す光は、誰がなんと言おうと、残像として焼

きついているのだ。

父のほうは、この話をきくと、長いコードの電球のことをなぜおぼえているのか、という私の疑問にはまったくお構いなしに、自分の推測をのべはじめた。

あれは、バクチ打ちの家だったんじゃないか？ というのである。

家の中をなるべく暗くして、ある一か所だけ照らし出したんだな。手入れがあつて踏みこまれたときでも、逃げるほうに持つて行つてから消せば、あとはまっくらになる――。

なるほど、と思ったが、考えるところかへんである。電灯がひとつしかないからといって、バクチ打ちの家だと思ふのも飛躍がすぎる、と思った。

そんなわけで私のいちばん古い思い出は疑問符にかまれているのだが、四歳までをすごした林町の家の残像は、いくつかたしかにのこっている。

玄関のガラス戸があいたままになっていて、そのすぐそこに植えてある笹の葉が風で揺れているのだ。誰かがいま出て行つたばかりなのだが、その誰かの姿は全く欠落していて、笹の葉だけが動いている。そして、母が真っ青な顔をして口もきけないほど、おびえているのである。

このときの話はあとで何度かきいたから、詳細はむろんのちの追加だが、非の打ちどころのないような上品な老婦人が、ていねいに挨拶してはいつてきたのだそうだ。そして、名を名乗るわけでもなく、母にきいた。

「櫂^{けやき}でダンスは、できるんでございますか？」

母がしどろもどろになっていると、

「いまに東京じゅう、原っぱになるんだそうでございますって……。ねえ」

泣くような笑いかたをして、姿を消したというのである。私がおぼえているのは、そのあとにのこって揺れている笹なのだ。

母の鏡台の上には、眼だけ光る黒猫の顔のついたペーパーナイフがのっていたし、林町の家にはこわいものが多かった。家の中ばかりでなく、横町を出た角の石垣の家は高利貸しで、正月にはその娘が二人、赤衣着物で羽根をついた。その姿が焼きついているのは、コーリカシというひびきが不気味だったからだろうか。

ドン白粉^{おしろい}

林町の家から西原町の母の実家までは歩いて五分もかからない。ドン白粉は、そのちょうど真ん中、林町郵便局のさきにあるので、看板が行き帰りにいやでも目にはいった。

大きな板を真つ黒に塗って、白い字で太く「ドン白粉」と書いてあるのだ。その白と黒のコントラストが子ども心にも不吉に映り、いまでも忘れられない。化粧品の看板なのに、どうしてあんな武骨なのをつくったものかと思う。

それから三十なん年かたって、宮澤賢治のことを調べに岩手の花巻へ行ったとき、同じような黒地に白文字の看板を見かけて、あの不吉な感じがよみがえったのである。

それは、この地方で集中的に布教活動をしているキリスト教の一派のもので、通りを曲がるとこんな文字に向き合うようにしてあるのだ。

「死後さばきにあう」

ドン白粉の文字には、同じくらいの脅迫的な殺気があって、いつも目をそらし、なるべく見ないようにしたのをおぼえている。

そもそも、工場だったのか事務所だったのかもさだかでないのだ。しかし、その前を流れるドブから湯気が立ち、いつも白い水がたまったり流れたりしていたから、ここであつたのではないかと思う。

それはとにかく、自分でもふしぎなのはそんな、なるべく見ないようにしていた文字を、なぜ練習したかということだ。「ドン白粉」は、私が自分の名前の次に書けるようになった、最初の漢字入り文字なのである。

「むかし神童いまタダの人」とはよくいったもので、その証拠に私もむかしは神童ではないか、と言われたのだ。小さいうちからやたらに漢字をおぼえて、それを年上の人の前で書いてみせたからである、

むろん、自分からおぼえたわけではなく、母の妹の、まだ幼いのを含む三人の叔母たちがすぐそばにいて、自分の習いたての字まで私に教えたので、そうだったのだ。

「わあすごいこの子……。教えるとおぼえる！」

一種のモルモットだったのだが、大人が驚くのが嬉しくて、むずかしい字ばかり練習して、得意になって書いてみせたのであつた。

「タコの八っちゃんのタコって書いてみる、まさか書けまい」